

時代のニーズにあった差別化



時代の流れをつかんで

創業323周年を迎えた県内でも五指に数えられる老舗、株式会社スズタメは、時代のニーズを先取りし、常にフレキシブルな対応と斬新なアイデアで世間の注目を集めてきた。その第14代社長が、鈴木賢一氏。

昭和16年、鈴木氏が生まれた1カ月後、日本は米英と開戦。宇都宮市も戦禍を被り、当時宇都宮のランドマーク的存在だったレンガ造りのモダンな三階建て店舗も10年ほどで焼失。しかし、戦後間もなく店舗を再開。そんな動乱の中で、少年期から青年期を中心市街地で過ごす。「学校帰りに友達の家を寄って遊んだり、今の城址公園の場で魚釣りをしたり、街中はとても活気があって、人情が厚かった」と、当時の古い地図を広げて懐かしそうに語る。

先代は、人形専門店、鈴為。を、スズタメに改め、洋服の仕立てや暮らしに必要な日用品、眼鏡、おもちゃなどの取り扱いを始める。鈴木氏も、高校卒業と同時に東京渋谷の洋装生地問屋に修行に出されたが、当時まだ珍しかったスーパーマーケット事業に着手するために3年で呼び戻され

る。それは、先代の先見の明ある才能を引継ぎ、さらにブラッシュアップさせた手腕による。スーパーストアが全盛を迎える中、全店事業撤退。塙田店を人形会館大曾店として改装し、人形専門店としてさらに事業拡大する。まさに、選択と集中。店舗名も以前の「鈴為」に戻し、ただ人形を陳列するだけではなく、ストーリーのある動線を用いて、さまざまなニーズにあった商品提案をしている。店舗内に太鼓橋を造り、家庭で飾られた状況をイメージできるように陳列の仕方もコーナーごとに変わる細やかな配慮。人形たちもさまざま、伝統的なものから、スパンコールの衣装をまとったものまで、店内を巡るだけでも楽しい。まさに、人形ミュージアムともいえる。まるで、人形を通して日本の文化を発信しているようだ。そうできるのも、自社で製造を手がけているからこそ。販促に関しても、決してありきたりではない。自ら有名な俳優や著名人と対談する雑誌『entertainment』を16年間発刊し続けたり、栃木県初のラッピングバスを走らせたり、とにかく型破りだ。

すずき けんいち
鈴木 賢一



Profile
昭和16年11月14日生まれ74歳。元禄6年(1693年)創業の県内屈指の老舗に長男として生まれ育つ。地元の栃木県立宇都宮商業高等学校卒。東京都渋谷の洋装生地問屋で3年間修行の後、家業に入る。人形専門店からスーパーマーケットなど新事業の立ち上げに尽力し、昭和62年に第14代社長に就任。昭和42年に幼馴染と結婚、2人の息子と3人の孫に恵まれ、息子たちと共に家業に邁進中。趣味はゴルフ。

その一方で、お客様の喜ぶことを第一に考え、子どもたちの名前や生年月日を入れ込んだ世界に一つしかない絵本をプレゼントし、一人ひとりの子どもたちの成長を願う。

型破りな発想

鈴木氏の戦略は、ひと言でいうならば「繊細で大胆」。確実に時代を読み、他との差別化を図る。それは、先代の先見の明ある才能を引継ぎ、さらにブラッシュアップさせた手腕による。

線に沿いに「人形会館」を開き、より専門性の高い商品を扱うようになる。先代の事業を受け継いで、鈴木氏が社長に就任したのは昭和62年、46歳の時。時代は昭和から平成に変わり、生活様式もニーズも多様化しはじめる。

地元愛と伝統への責任

かつては、二荒山を中心に商店がひしめき、それがひとつにまとまり、ユニークなイベントを企画運営して、多くの人々を市街地に惹きつけていたそう。店を閉めた後、みんなで集まって、さまざまな案を出し合った。自分のところだけじゃなく、街全体が賑わうように。例えば、1日中街中を歩いて周回しハワイ旅行を当てよう！とか、お金のつかみ放題とか。「今の再開発ビルには、企業や住居が多く、店舗が少ないのが残念」と愛えるのも、地元を愛し地元の発展を願うからこそ。

「社長は、誰よりも働くし、動く」と言うのは、長男の鈴木雄一取締役副社長。家庭にあっては、朝5時から庭の手入れにいきなり、配達センターでも率先して作業をし、もちろん、店舗でも接客をかつて。アイデアもどんどん実践。息子たちの孫にも惜しみなく愛情を注ぎ、孫自慢をする笑顔も幸せそう。その愛情深さは、たった7匹の熱帯魚が1000匹を超えるほどに育ったことから伺える。

地元を根を張るリーディングカンパニーとして、圧倒的な存在感をみせるのは、地元で育ち、300年を超える伝統と信頼の重みを引き継いでいるからこそ。「新しい取り組みは息子のアイデア。早く代を譲りたい」と謙遜しつつも、引退が許されるのはまだまだ先のようだ。【取材日：平成27年12月2日】